

「
女
の
本
性
」

登場人物

沢村 ゆり子 (3・8) 主婦

沢村 新平 (3・6) ゆり子の夫・会社員

笹本 静代 (6・8) 沢村家の隣人

森村 正江 (6) 静代の友人

沢村 空 (3) ゆり子の長女

引越し業者

○ 走るタクシー・車内

外は大雨。後部座席に座り子供用の空色の帽子を握り、放心状態で窓外を見る、喪服姿の沢村ゆり子³(8)。

その隣で、笑顔の沢村空(享年3)の遺影と骨壺を抱えて俯く、喪服姿の沢村

新平³(6)。

○ (回想) 公園

雲ひとつない青空に、多くの蝉の声。

空(3)、空色の帽子を被り滑り台の上から笑顔でゆり子に手を振る。

空「ママ〜！」

○ 元の走るタクシー・車内

窓外を見て涙を流すゆり子。

ゆり子の涙が落ち、濡れる空色の帽子。

○ (回想) マンション・エントランス・前

手を繋いで、笑顔で歩くゆり子と空。

空の被る帽子、強風に煽られ宙を舞う。

空「あっ！」

繋ぐ手を離し帽子を追いかけて、道路の方に飛び出す空。追いかけるゆり子。

ゆり子「（大声で）空、危ない！！」

クラクションを鳴らすトラック、急ブレ

ーキで止まると同時に鈍い音。

次第に一面が、赤い血で染まる道路。

そこに頭から血を流して横たわる空。

ゆり子「そら！！」

悲鳴をあげるゆり子。道路の片隅に、

ゆっくり落ちる空色の帽子。

○元のマンション・エントランス・前

停車するタクシーの中から、ゆり子と

沢村が降りてきて。

ゆり子「そらゝ！」

沢村「ゆり子！」

嗚咽し動けないゆり子。支える沢村。

○ マンション・外廊下・沢村家の部屋・前

沢村に支えられ、俯き歩くゆり子。

隣の部屋の前、立ち話をする笹本静代

(8) と森村正江 (6) 。

6 静代、二人に気付いて。

静代「沢村さん。お疲れ様」

沢村「昨日は、ありがとうございました。お通夜に出て頂いたうえに、お手伝いまでしていただきまして……」

静代「そんなこと気にしなくていいのよ。それより、2人とも気を落とさずしっかりね」

沢村「ありがとうございます」

静代とは目を合わさず、泣きながら部屋に入るゆり子。

静代、正江との立ち話に戻っていく。

○ 同・沢村家・ダイニングキッチン

小祭壇の前で、へたり込むゆり子。

遺影と骨壺を置く沢村、ロウソクに火をつけ、お線香をたいて。

沢村「さあ、空。おうちに着いたよ」

ゆり子「新平、ごめん。私が悪いの。あの時、私が空の手をしっかりと握っていれば……」
咽び泣くゆり子。沢村、ゆり子を優しく抱きしめて。

沢村「もういいって。それよりゆり子、あれ以来、あまり眠れてないんだろ？」

ゆり子「うん……」

沢村「今、温かいココア入れてくるから。それ飲んで少し休もう」

ゆり子「ありがとう」

席を立ち、キッチンへ向かう沢村。

ゆり子、空の遺影を呆然と見つめ、帽子を力強く握りしめる。

沢村「そういえば、その帽子。そんなのいつ買ったってあげたっけ？」

ゆり子「お隣さんがくれたのよ」

沢村「笹野さんが？」

ゆり子「そう。私は申し訳ないから、結構ですって断ったのに……」

沢村「そう……」

ゆり子「なのにあの人、これ空に被せて褒めるから。空も喜んで燥いじゃって……」

沢村「でもさ、空がそんなに気に入ってる帽子なら、何で棺に入れてあげなかったの？」

ゆり子「聞こえたの。あの子の声……」

沢村「えっ？」

ゆり子「この帽子はママが持ってて、って」

空色の帽子をじっと見つめるゆり子。

○ マンション・外観（朝）

朝日が当たらず薄暗い。

○ 同・沢村家・ダイニングキッチン（朝）

小祭壇、遺影の前にある空色の帽子。

ソファ―で横になるゆり子、起き上がる。

ネクタイを締める沢村、ゆり子の隣に

来て。

沢村「大丈夫か？　まだ、顔色悪いぞ？」

ゆり子「うん。でも……」

沢村「無理しなくていいよ。家事だったら、俺
がやるから。今日はゆっくり休んで」

ゆり子「ありがとう」

沢村「けどごめんな。こんな時に仕事なんて」

ゆり子「仕方ないよ……」

沢村「じゃあ、行ってくる」

ゆり子「いってらっしゃい」

少し微笑み、沢村を見送るゆり子。

テーブルの上、沢村の忘れ物に気づき

追いかける。

○同・玄関（朝）

履物を履きドアを開けるゆり子。外か
ら静代の声が聞こえ、静かに閉める。

○同・外廊下・笹野家の部屋・前（朝）

立ち話をする静代と正江。

正江「それにしても、隣の奥さん気の毒だわ」

静代「どうかしら。今頃、悲劇のヒロインぶっ
て、遺影の前で泣いてるんじゃない？」

正江「あら、どうして？」

静代「だってあの人、気取り屋だから」

正江「そうなの？」

静代「（小声で）ここだけの話よ。お通夜の時に、奥さん帽子持ってたでしょ？」

正江「ああ、あの水色の？」

静代「そう。あれね、本当は3人目の出産祝い、うちの嫁にあげた物なのよ。でもさ、いらないうって断られて」

正江「あら」

静代「そのまま捨てるのも癪に障るから。隣の子に押し付けちゃったのよ」

正江「まあ」

静代「（笑い）そうしたらさ、空ちゃんが大喜びしちゃって。お陰で私はスッキリよ。あら、嫁への腹いせ、隣人で済んじゃったわって」

正江「やだ、静代さんったら！」

ゲラゲラと笑う静代と正江。

ゆり子の声「（低い声）やっぱり。そういうこ

とだっただんですね……」

ドキツとなり横を見る静代と正江。

ゆり子、静代を睨みつけて立っている。

手には握り潰された帽子。

ゆり子「空はこの帽子が大好きだったの！

あなたに褒められたことが嬉しくて。片時

も離さなかった」

静代「……」

ゆり子「あの日だって、私は強風だから帽子

なんか、被せたくなかったのに……」

静代に帽子をぶつけ、すごい剣幕で詰め

寄るゆり子。驚き青ざめる静代。

ゆり子「空はあなたがくれた、この帽子のせ

いで死んだの！」

静代「……」

ゆり子「返してよ！ 空を返して！」

泣き崩れるゆり子。戸惑い黙る静代。

床の上には、皺くちやの空色の帽子。

引っ越し業者が数人、沢村家の部屋を
慌ただしく出入りしている。

隣の部屋の前から一瞥している静代。

タイトル『半年後』

引っ越し業者「荷物はこれで最後ですネ？」

沢村「あっ、はい。宜しく願います」

部屋の中から出てくるゆり子と沢村。

二人から目を背ける静代。

ゆり子、静代に気付き駆け寄って。

ゆり子「今まで、色々とお世話になりました」

静代「あのこれ、空ちゃんの形見だから……」

と静代、ポケットから、空色の帽子を取
り出す。

ゆり子「いりません！」

静代「どうして？」

ゆり子「確かにその帽子には、空の思い出が
詰まっています。けど私はもうこれ以上、辛
い気持ちは引きずりたくないの」

静代「そう……」

ゆり子「（呟く）それに、この子には空と同じ

思いはさせたくないし……」

とゆり子、微笑みお腹をさする。

静代「えっ……？」

沢村の声「ゆり子！ そろそろ行くよ！」

ゆり子「（笑顔で）それでは、失礼します」

一礼して去って行くゆり子、その先に沢

村がいて、仲良く肩を寄せて歩く。

その様子を唇噛んで睨む静代。

静代「こんなもん……」

と、空色の帽子を近くに置いたゴミ袋
に投げ捨てる。

○同・エントランス

沢村と肩を並べて歩く、笑顔のゆり子。

一瞬、ニヤリと笑って歩き去る。

○同・静代の部屋・前

他のゴミに混じり、無残になった空色の
帽子。

(E N D)